View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kobe Shoin Women's University Repository KARASHI-DANE

Kobe Shoin Women's University Repository
KARASHI-DANE

A Formal and Corpus-based Analysis of Grammaticalization of ik ‘go’ in Japanese

著者	Arai Fumihito
著者別名	新井 文人
学位名別名	doctor
学位授与機関別名	Kobe Shoin Women's University
報告番号	甲第6号
学位授与年度	2014
URL	http://doi.org/10.14946/00001679

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

論文要旨

A Formal and Corpus-based Analysis of Grammaticalization of *ik* ‘go’ in Japanese
（日本語の「行く」の文法化に関する形式的・数量的分析）

本研究の目的は，形式的・数量的分析を用いて，日本語の移動動詞「行く」の文法化プロセスを解明することである．本研究では特に，文法化の過程で見られる 3 つの語形—本動詞「行く」,「動詞（連用形）＋ゆく」（V ユク）,「動詞＋て＋ゆく／いく」（V テユク）—の相互関係を意味・統語の両面から詳細に説明すること，現代日本語において V テユクで起こる形態音韻的変化—V テイク対 V テクという言語変異現象—を引き起こす要因を考察すること，という 2 点に重点を置く．(1a–c) は「行く」，V ユク，V テユクの例であり，後者 2 つには移動用法とアスペクト用法が存在する．(1b,c) のうち，(i) の文は移動用法の，(ii) の文はアスペクト用法の例である．(2) は，V テユクで起こる形態音韻的変化の例である．

(1) a. 「行く」
　　ケンが山道を行く．
　b. V ユク
　　i. ケンが山道を走りゆく光景
　　ii. 花が枯れゆく光景
　c. V テユク
　　i. ケンが山道を走ってゆく．
　　ii. 花が枯れてゆく．

(2) 遠足へたくさんお菓子を｛持っていく／持ってく｝．

本論文では，先に挙げた 2 つの課題に関し,（ア）現代日本語において V テユクが広く普及しているのは，文法化の過程で起こった V ユクから V テユクへの革新 (renewal) に起因すること,（イ）V ユクから V テユクへの革新を引き起こした要因として意味・統語のレベルでの両語形の構造的一致が考えられること，そして,（ウ）V テユクで起こる形態音韻的変化には言語的要因と非言語的要因の両方が関与すること，の 3 点を主張する．本研究の独自性・新規性は，移動動詞「行く」の文法化プロセスを包括的に説明することを目標に，生成語彙意味論の枠組み (Pustejovsky 1995, 影山 2005, Hidaka 2012) に従った理論的分析と変異理論 (Weinreich, Labov, & Herzog 1968, Labov 1969 *et seq*, Tagliamonte 2012 他) で用いられるコーパスデータに基づく数量的分析を組み合わせて，文法化という言語変化の一現象に詳細な説明を与えた点である．

日本語の移動動詞「行く」に関しては，その意味記述に焦点を当てたものや歴史的変遷あるいは文法化の進み具合を考察したもの等，様々な観点からこれまで多くの研究がなされてきた（第 2 章を参照）．しかし，管見の限り，先述した課題に関する考察はこれまで行われていない．その課題の解決にあたっては，2 つの異なる方法論を採用する必要がある．なぜなら，第 1 の課題—「行く」，V ユク，V テユクの相互関係—は質的にあるいは演繹的に説明されるべき問題であり，一方，第 2 の課題—V テユクで起こる形態音韻的変化に関与する要因の特定—に取り組むには数量的・帰納的アプローチが求められるからである．それゆえ，本研究は理論的分析と数量的分析を組み合わせて「行く」の文法化プロセスの解明を目指す．

理論的分析にあたり，本研究は (3) に示す意味表示を提案し,「行く」，V ユク，V テユクの意味構造を形式化するとともに，Roberts and Roussou (2003) に従ってこれら 3 つの語形の統語構造を考察する．

(3)
$$\begin{bmatrix} \text{語彙素} \\ \text{ARG} = \begin{bmatrix} \text{統語構造における項} \end{bmatrix} \\ \text{QUALIA} = \begin{bmatrix} \begin{bmatrix} \textit{Truth-conditional Section (TS)} \\ \text{FORMAL:} \quad \text{語の時間的特性, 距離関数 (}\textbf{DIS}\text{), 視点関数 (}\textbf{POV}\text{)} \\ \text{CONST:} \quad \text{語彙概念構造 (LCS)} \end{bmatrix} \\ \begin{bmatrix} \textit{Non-truth-conditional Section (NTS)} \\ \text{TELIC:} \quad \text{その動詞の持ち得る結果状態} \\ \text{TRIGGER:} \quad \text{成立するための外的要因} \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

数量的分析では，V テユクで起こる形態音韻的変化に影響を与えるであろう言語的・非言語的要因を設定して考察を進める（第 3 章を参照）.

第 4 章では第 1 の課題に関する理論的分析を提示する．本研究は，この課題を次のように説明する．V ユクから V テユクへの革新は，これら新旧 2 つの語形—歴史的には V ユクがより古いとみられる—が意味・統語の両レベルで構造的一致を見たことにより引き起こされたものである．意味・統語レベルでの構造的一致は，V テユクがアスペクト用法において再分析 (reanalysis) ([V-*te*]-*yuk* > V-[*te-yuk*]) されたことに因る．再分析の結果，統語的には *te-yuk* 全体が 1 つの形態素として機能範疇である Deixis Phrase (Nishigauchi 2014) の主要部に基底生成されるようになる．これにより V ユクと V テユクの構造が意味・統語的に一致し，また，時代が下るにつれてテ形複雑述語が発達していった結果，V テユクが広く普及するようになっていった．その一方で，V ユクは非生産的な語形となり，現代日本語では（一部の環境を除き）ほぼ消滅してしまったのである.

第 5 章では第 2 の課題を分析する．本研究では，V テユクの形態音韻的変化に対して統計的に有意な要因を探し出すだけではなく，有意な要因間での影響の大きさの違い (effect magnitude) や要因内での階層関係 (hierarchy of constraints)—例えば，男性と女性であればどちらがより変化を受け入れるか等—も考察する．分析結果から，本研究は同現象には先行動詞の頻度，話者の性別，文脈，話者の出身地，スピーチスタイルが関与し，特にスピーチスタイルが他の要因に比べて大きく影響することを主張する．このように，本研究では理論的・数量的分析の両方を駆使し，日本語の移動動詞「行く」の文法化の全体像を捉える.

第 6 章では，第 4 章での議論を補強する目的で，革新における V ユクと V テユクの意味・統語レベルでの構造的一致についての議論を深める．そこでは，移動動詞「行く」が格付与と視点に関する 2 つの統語的素性を持つことを提案し，これらの素性が V ユクと V テユクの移動用法におけるユクの主要部移動とアスペクト用法におけるその抑制を説明する上で重要な役割を担うことを主張する．具体的には,（ア）V ユクと V テユクの移動用法において想定されるユクの主要部移動 (V-to-Deix movement) は，2 つの統語的素性を別々の位置で照合するために引き起こされること,（イ）これらのアスペクト用法ではユクあるいはテユクが視点素性しか持たず，Deix に基底生成されるために主要部移動が抑制されることを説明する．さらに，意味構造においては，格付与と視点に関する 2 つの統語的素性がそれぞれ別のクオリアと結び付けられることを述べる．具体的には，格付与に関する素性は構成役割 (CONST) と，視点に関する素性は形式役割 (FORMAL) と関係することを主張する．その根拠として,（ア）視点素性の具体的値は，意味構造において，距離関数と視点関数が「行く」の直示性（あるいは方向性）を指定する形式役割によって決定されること,（イ）構成役割は語彙概念構造によってその動詞の統語構造における項が指定される位置であることの 2 点を挙げる．また，語彙項目における論理的意味と非論理的意味の区別に関する議論 (von Fintel 1995, Roberts & Roussou 2003) を参考に，本研究は，形式役割は「行く」の論理的意味であること，一方，構成役割は非論理的意味であることを主張する．その理由として，形式役割でその具体的値の決まる視点素性は文法化に係わらず一貫して「行く」に残るが，格付与素性は移動を表わす「行く」，V ユク，V テユクにはあるが，文法化の結果，アスペクトを表わす後者 2 つの語形では消失していると考えられることを挙げる．加えて，統語的証拠を示しつつ，本研究で示す理論的分析が「来る」「くれる」「あげる」とそのテ形複雑述語「V テクル」「V テクレル」「V テアゲル」の意味・統語構造をも説明することを述べる.

最後に，本研究は次のような理論的展望を持つ．1 つは，生成語彙意味論が文法化という言語変化の一現象に現れる複数の語形の相互関係を明らかにする上で有効な理論的枠組みであることを示した点である．もう 1 つは，理論的分析と数量的分析を組み合わせることは，動詞から補助動詞への変化に代表される文法化のプロセスにおいて何が起こっているかを意味と統語の両面から詳細に説明するだけでなく，文法化が進んだ段階で見られる形態音

韻的変化の原因を明らかにすることをも可能にする点である．つまり，理論的分析と数量的分析は相互補完的関係にあり，両者を組み合わせることで文法化のような言語変化の研究に新たな視点をもたらすということである．

参考文献

Hidaka, T. (2012). *Word Formation of Japanese V-V Compounds*. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.

影山太郎 (2005).「辞書的知識と語用論的知識–語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」.『レキシコンフォーラム 1』, pp. 66–101. 東京：ひつじ書房.

Labov, W. (1969). Contraction, deletion, and inherent variability of the English copula. *Language*, **45** (4), 715–762.

Nishigauchi, T. (2014). Reflexive binding: awareness and empathy from a syntactic point of view. *Journal of East Asian Linguistics*, **23** (2), 157–206.

Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.

Roberts, I. & Roussou, A. (2003). *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Tagliamonte, S. A. (2012). *Variationist Sociolinguistics: Change, Observation, Interpretation*. Malden/Oxford: Wiley-Blackwell.

von Fintel, K. (1995). The Formal Semantics of Grammaticalization. *NELS 25 Proceedings*, **2**, 175–189.

Weinreich, U., Labov, W., & Herzog, M. I. (1968). Empirical Foundations for a Theory of Language Change. In Lehmann, W. P. & Malkiel, Y. (Eds.), *Directions for Historical Linguisitcs*, pp. 95–195. Austin, TX: University of Texas Press.